

第4回 活力ある経済社会を目指す検討小委員会 議事録

日時：平成19年11月8日(木)10:00～12:00

場所：博多第三偕成ビル 4階 会議室

【事務局】 時間となりましたので開会します。本日の司会を務めます、企画部広域計画課 佐々木と申します。まずは資料の確認ですが、議事次第、資料1が前回の主なご意見、それから折り込みになっている資料1-2、資料2-1が今回ご議論いただきたい事項、資料2-3が論点3の関連資料集、資料2-4が論点4の関連資料集、論点4に関しては、追加資料を1枚用意しています。資料2-5が論点6の関連資料集、それから中間レポートの素案が資料3でございます。資料4で今後のスケジュール、参考資料1として前回会議の議事録、参考資料2が補足資料でございます。参考資料3が論点整理のたたき台。そして、九州圏広域地方計画に関する提言集 第2集を用意しました。続きまして、ご出席の委員を紹介します。座長の外井委員、青木委員、鳥丸委員、根岸委員、深川委員、星野委員、山中委員、アドバイザーの矢田アドバイザーです。本日、両角委員は欠席です。お手元に出席者名簿を配布しております。それでは早速、本日の議事に移らせていただきます。ここからの進行は座長の外井座長にお願いします。

【外井座長】 今日は残された課題と、レポート案について議論したい。今日は議題が大きく二つあります。まずは、第3回検討小委員会における検討状況等について、事務局から資料説明をお願いします。

【事務局】 九州地方整備局 建政部 計画・建設産業課長をしております大井です。それでは議題(1)(2)をあわせて説明します。資料1-1に7月13日に行われました第3回の検討小委員会でのご議論をまとめています。

第3回においては、論点5と論点7について検討いただきました。論点5では、東アジアへの玄関口としての社会基盤の整備について、物流インフラを整備する必要性や複合一貫輸送を実現することが重要といったご意見をいただきました。アジア諸地域との「多頻度・多経路・多地域」連携についてもご意見をいただいたところでございます。また論点7では、多種多様な人材が集積する産業構造の形成について、都市が活性化し、多様性と寛容性が新しい産業を創出する、そういった産業が生まれてくる容器としての都市という考え方が必要ではないかということ、あるいは、九州圏の人材資源をどのように活かしていくのかという観点も必要といったご意見をいただきました。

資料2は、今までの活力検討小委員会でご議論いただいた論点についてまとめておりますけれども、今回ご議論いただく論点3, 4, 6以外の論点について、資料中央下に簡単に整理しています。また、前回の追加資料として用意すべきとご指摘いただいた資料を参

考資料として用意しております。

【事務局】 それでは資料2について説明させていただきます。本日も議論いただきたいのは論点3, 4, 6です。資料2-1をご覧ください。

まず論点3はものづくり基盤の強化でございます。ものづくりを支えている熟練技術・技能者個人のノウハウが、近年の現場の高齢化、あるいは若年層の製造業離れ等により、その継承が危ぶまれている中、技術・技能レベルの低下を防ぎ、ものづくり産業における製品の付加価値や企業競争力を高めるといった視点が必要ではないかという論点でございます。左側にそれを現す現状データを示しています。他産業と比較して製造業において、若者を中心とした就業者離れが進んでいること。一方、求職と求人のミスマッチが生じており、サービス業に比べて専門的な技能・技術が必要な製造業においては有効求人倍率が1を大きく超えており、人手不足が顕著であること。企業の技術力については低下の危機にあるのではないかという点について、技術論文が海外企業のサムスンに比べて大きく減少していること。それに呼応してアジアとの水平分業という問題が出てきますが、今後韓国や中国の企業が台頭してくるのではないかという、企業アンケートの結果がございます。これらの課題に対する対応の方向性を3つ掲げています。人材の雇用育成環境の再構築、研究開発・学習の振興、これは論点7と関係がございます。また、企業競争力の強化・向上がございます。その下に、こういった連携が考えられるかを図示したものがございしますが、企業、研究機関、公的機関、あるいはNPOなどの団体が連携して、それぞれのミスマッチを解消していく必要があるのではないかと示しています。

論点4は、観光資源等による魅力創出という論点を掲げています。世界との交流・連携を形成するには、学術・文化・観光など多面的な交流が重要ではないか。現状データとして、宿泊客数の推移は、少しデータは古いですが、特に大きな伸びは見られません。一方、九州各県の入り込み客数は微増になってはいますが、これは日帰りの客数が多いのではないかと考えられます。また、近年の観光ニーズをみると、「美しい自然・風景を見る」や「温泉での休養」が上位にあり、九州圏の魅力を活かす土壌があると考えられます。国際的な文化交流について、九州圏における国際コンベンションの開催件数がありますが、一定程度の件数が開催されていますが、近年伸び悩み、九州の留学生の数も頭打ちといったところです。これらの課題に対する対応の方向性は、情報発信機能の強化・認知度向上が重要ではないか、地域資源の創出・活用など戦略的な観光振興が重要ではないか、観光環境の整備や受け入れる者の質の向上が必要ではないかということです。九州の魅力が何かを検討し、効率的に発信していく、また観光環境整備ということで受け入れ体制を整備が必要ではないか、ということです。

続いて論点6、持続的な成長を牽引する都市圏の形成ですが、九州圏の国際競争力の強化に向けて、ソフトな産業の集積を進め、九州圏全体を牽引していくことが必要ではないか、また、生活圏の中心となる都市を魅力ある就業の場とすることで、持続可能な生活圏

を維持することが必要ではないか、ということです。現状データでは、九州の地方中枢・中核都市圏の設定のイメージを掲載していますが、九州では満遍なく都市圏が分散していることが分かります。一方で、拡散も進んでいることを示すデータとして、都市圏・生活圏における中心性の希薄化というデータを作っております。都市が創造する産業の核となる文化・芸術ということで、創造産業同心円モデルを掲載していますが、これは都市の再生や中心都市の活性化のためには市民や企業が創造性を発揮できる都市、創造都市になる必要があるのではないかと、創造産業あるいはICTなどの人材育成がなされる土壌が必要ではないか、という提起です。その下には第3次サービス産業が必要だというデータを示しています。これらの課題に対する対応の方向性として、魅力ある都市圏の創出のためにはどういった方向性が必要かということで、新たな都市型産業の育成・支援、各産業等の集積と融合により付加価値の高い産業を育成し、若い人材にとって魅力的な活躍の場を創造することが重要ではないかといったことを示しています。

資料2-1については以上ですが、資料2-2、3、4で論点3、4、6について関連する資料を示しています。それぞれのポイントを説明いたします。まず論点3については、2ページに技術の継承・伝承ということで造船業を挙げております。また3ページでは、九州圏域内に分布する工学系の学部を持つ教育機関の分布状況を示していますが、例えば高校卒業生の就職率を産業別に比較しますと、製造業は圏外へ流出していることが分かります。

次に資料2-3は、観光のデータを主に示していますが、新聞等でも取り上げられているものとして、4ページの歴史・文化、祭りの観光資源としての活用、あるいは産業遺産を活用した地域づくりを示しています。また10ページには、特にアジアからの観光客が多いため、訪日動機のデータを示しています。こちらについての最新資料を追加資料としてお配りしています。2006年の訪日動機では「ショッピング」が1位でした。論点6については省略させていただきます。

事務局からは以上です。

【外井座長】 前回の確認について議事録の照会をお願いします。特にないようでしたら、本日の議題へ移りたいと思います。資料2-1、2-2、3、4を参考に、3つの論点について一括して発言をお願いします。

【山中委員】 論点3について、資料2-1対応の方向性ということで、人材の多様性を踏まえた新たな人材育成環境の構築（女性人材、ニートの雇用等）とございますが、前回も申し上げたのですが、情報の観点が弱く、具体性が不足していると思います。女性の活用についてということがいえるかと申しますと、女性の在宅勤務、自宅のできる仕事がたくさんありますが、情報ネットワークを活用しなければ不可能です。情報社会の新しい雇用形態でありますし、具体的な観面で、情報化は避けて通れないところです。退職女性

にはITスキルがあります。具体的な方策として情報基盤の話を入れるべきだと思います。労働力調査年報における情報通信業の就業者の比率を見ると、九州は非常に低くなっています。15～24歳の就業者は全国平均より高いですが、25～44歳の就業者が少ない。クライアントの業界知識もないとシステム開発はできない。そのためには経験が必要で、ここが手薄になっています。女性の活用だけでは、具体性はなかなか見えてこないと思います。

【外井座長】 女性の社会進出には、情報化が欠かせないということでした。

【星野委員】 私は論点4の観光資源について述べたいと思います。観光における人材の育成、現場を支える人材ではなく高度な人材育成が重要です。九州に資源が豊富なのは周知のことであり、これを対外的に発信できていないことが九州の問題であり、戦略的にブランディングし、プロモートする人材が必要である、ということです。ホスピタリティマネジメントの人材育成について調査したことがありますが、日本で観光学科を設置しているところは多いけれども、現場がミドル層しか育成していない。九州をみても高度な人材を養成するには至っていない。観光資源の掘り起こしと活性化においてもものづくりと同様に人材の育成が必要だと思います。

【外井座長】 そういう高度人材はどういう場所で活躍するのだろうか。

【星野委員】 九州観光推進機構などの大きな団体かもしれないし、より地域に密着した職場でも、全体を見通して広い視野で見て戦略的に動ける人は必要だと思います。

【鳥丸委員】 今の星野先生のお考えについて、私も全くその通りだと思います。観光資源をプロモートする高度人材の育成は大事だと思います。湯布院でも冷徹な経営者が、地域を経営し、旅館を経営しています。湯布院というと、地産地消やまちづくり基本条例などが取り上げられるが、冷徹な経営者が厳しく経営をしている。こういう試行錯誤で進めてきた知識を体系立ててまとめて、共有知とすれば武器になると思います。

ものづくりについてですが、中小企業振興法が施行され、技術のたな卸し調査をしたことがあります。自分たちの作っているものや技術に自信のない経営者が多く、トライアル発注制度のような施策も有効だと思います。ものづくり基盤が強化されているものの、それが活用されていないということもいえると思います。

【外井座長】 戦略的な人材と厳しい経営者が必要ということだと思います。

【根岸委員】 観光の人材育成の必要性を、私も痛感しております。県境の地域において、広域的な観点でどう位置づけていくのか、プロデュースしていくことについて人材が不足

していると思います。九州のなかでノウハウが少ないところです。

ものづくりについてですが、宮崎県内の工業高校の生徒は、東京の電力会社から高い評価を得ていて内定が出ています。工業系の高校では、大都市部に比べて地方の学生に勤勉な生徒が多いということが、大企業から高く評価されている。人口減少の中で実業高校が輝けるような再編、地域の企業と一体となったシステムを考えていければよいと思います。

【青木委員】 ものづくり人材について考えを述べたいと思います。現場において若年人材が不足しているという現状については、教育構造自体に問題があると思っています。良い大学を出ていれば、良い会社に就職できるから安心だという社会通念があります。本来は子どもは十人十色のはずであって、大学を目指して一流企業に就職するという人ばかりではないはずです。それぞれ個性と向き不向きがあるはずなのに、今の日本社会にはこれを認めない雰囲気があることが問題だと思っています。一流大学に行かないと将来はないという通念の打破が求められているのではないのでしょうか。ものづくりは楽しいし、自分の個性に合った進路に進めば、その人の能力が高められるはずです。ものづくりで成り立っている日本はもっともっと「職人文化」を大切にしなければ日本の未来はないと思います。車の工場働くことだけがものづくりではなく、伝統工芸や芸術などもものづくりだと思います。欧州には「職人文化」大切にされていることで、数多くの世界に誇る陶器、ファッション、伝統工芸品などがあり、それが魅力となって観光集客につながっています。若者たちに対して価値観を示し、幼いうちからものづくりの楽しさに触れさせ、体験させることで、ものづくりに将来を見出させるような教育が必要だと思います。今若者は安易なサービス産業に簡単に就職して、時間で収入を得ると考えている若者だけではいけないはずで、社会がもっと彼等に多くの選択肢を提供すべきだと思います。

【外井委員長】 現状データの中にも、求人・求職のミスマッチが示されているようです。資料にあるマイスター制度などでどこまで対応できるかということもあると思います。

【深川委員】 まず、論点5の補足参考資料、アジアのインフラについての資料作成、ありがとうございました。

今の青木委員のお話に関連しまして、ミスマッチの原因は、技術の現場の魅力低下や、そういう状況をもたらしたグローバル化の影響もあります。今、モノづくりの現場は、激しいグローバル競争にさらされて、余裕がなくなっており、それが就業条件に反映されて、他産業と比べた就業条件は不利になっています。そのような変化が、若者の、技術離れを起こしている可能性もあります。

次に提案ですが、グローバル化と競争激化の世界で、少子高齢化の日本が生き残る一つの道は、アジアのパワーとエネルギーを取り込むことだと思います。そこで、論点の6【都市圏】に関わることで、コンテンツ産業に関わる、アジアの優秀な人材を、九州に引

きつけることは、考えられないでしょうか。アジアとの交流に際しては、語学の壁が大きいわけですが、コンピューター、アニメーション、デザイン、映画、ゲームといった世界は、映像等の、いわば国際共通言語が存在し、仕事に際して日本語習得のハードルが高くありません。そのため、語学能力に関わらず、有能な人材を集めることが可能です。加えて、初期投入のコストも、ハードな産業に比べて大きくありません。映画、アニメーションなどの、ポップカルチャーは、今後、アジアの発展に伴いマーケットの拡大が見込まれています。コンテンツ産業によるアジア拠点化は、アジアとの日帰りビジネス圏の形成によっても実現の可能性が高まっています。アジアのアーティストたちの九州での活動は、新たな観光イメージの創出にもつながります。加えて、若者文化の発信拠点となることで、若者は地域に魅力を感じるようになるでしょう。それにしても、まずは、アジアの優秀な人材が、ここで仕事をしてみたい、住みたい、と思うような、地域づくりや、都市づくり、が重要です。

【外井委員長】 海外の優秀な人材をひきつける必要性があるということだと思います。

【矢田アドバイザー】 全体構成について、今日の議論はほとんど地域を担う人材の育成が圧倒的に多く、ひとつの大きな項目なのだろうと認識しています。子育て環境の整備からローカル教育とグローバル教育、ものづくりの担い手、観光人材、アジア人材と、これは戦略としてまとめた方がよい。今日は多面的にお話いただいたので、いわゆる新たな公というようなところを含めて柱として打ち出していくとよいように思います。ただ九州らしさをどのように入れるかが重要で、深川委員のアジアの話も有効だろう。

【外井座長】 レポートに反映させるということは可能でしょうか。

【事務局】 人材育成を一つの柱として検討することを宿題としていただき、反映させるべく、勉強したいと思います。

【外井座長】 人材育成のほかにはいかがでしょうか。

【星野委員】 インターンシップは重要な施策と思いますが、今のインターンシップでは効果が限られているような気がします。地域に対して、企業に対して、大学に対してどれだけインパクトがあるか不明です。どれほどの実効性を持っているか、見えないところがあります。よい枠組みとは思いますが、どう有効に機能させるかを検討することが必要だと思います。

【外井座長】 論点6の持続的な成長を牽引する都市圏という論点で、コンパクトシティ

の視点は必要ではないか。コンパクト化そのものが何かを生み出すものではないが、うまくまとめていかないと、人口減少の中で無駄が多くなってしまう。あまり広がらないように、都市中央部の核の活性化も必要ではないかという気がします。持続的な都市の成長として本小委員会のテーマとなるべきではないかと思います。

【青木委員】 山中委員の言われた女性の在宅勤務について、私の意見を述べさせていただきたいと思います。女性と若者の活用は大きなテーマとなると思います。これからは決まった場所で勤務することが働くということではない時代になりつつあります。男性についても言えます。情報化が発達する世の中で在宅勤務を育むシステムの整備が必要だと思います。ひとつ事例として、私の知り合いにソフトウェア開発を行っている社長さんがいて、彼は在宅の女性の力を行かそうと考え、会社からパソコンを持たせ、技術を教えながら、子育てしながら無理のない在宅勤務をしてもらっています。大変成功しているようですが、しかし、今日本にはこのような企業を支援するような制度がないので、小さなベンチャー企業がそのようなことを続けることは限界があるようです。在宅勤務を活用する人々に対する社会的支援システムの整備が必要だと思います。

【鳥丸委員】 まちづくり三法による規制強化で、コンパクトシティに向かっていくとは思いますが、そのときに平成の大合併が足かせになっている事例があります。合併時の公約である、中心部に集積させないという条件に縛られている首長さんがたくさんいらっしゃる。国の視点で、コンパクトシティの必要性を盛り込んでおくことが重要かと思います。

【外井座長】 次の議題のレポートについてご説明をお願いします。

【事務局】 資料3でございます。第3回までの議論を踏まえ、かつ本日もご議論頂いた部分については、事務局の私案ではありますが、それらを盛り込んで中間レポートを作成しました。中間レポートは3章から成ります。第1章は現状と課題、第2章に対応の方向性。第1章は第1節に九州圏の圏土構造の位置づけと特徴について、東アジアとの関係、あるいは発展する北部九州の都市圏とそれ以外の地域の関係などについて触れております。第2節では九州圏を取巻く経済社会情勢の転換ということで、人口減少・少子高齢化の進行と産業構造がそれに伴って転換していること、東アジア等の経済発展と九州圏の国際化について触れています。これを踏まえまして第3節の九州圏をめぐる様々な課題では、活力ある経済社会を目指す検討小委員会の論点にかかわる課題を挙げています。(1) 東アジア等の経済発展に連動した国際競争力の強化、(2) 人口減少下における地域の自立的発展と九州圏の活力の強化、(3) 産業振興を支える交流・連携の推進、と整理しました。

それに基づき第2章は、第1節と第2節に分けました。この検討小委員会でご議論いただいた8つの論点を多少組み替えて7つに分けました。1節では九州圏の特長を活かした

産業振興の競争力の強化とし、2節では受け皿を形成するという観点から、九州圏の産業振興を支える環境の構築。

最後の第3章では、活力ある経済社会の実現に向けて、こういった視点が必要なのかをまとめています。簡単ではございますが、資料3の説明は以上です。

【外井座長】 先ほどいただいたご意見をどこに入れればいいのかも含め、ご意見を申し上げます。

【山中委員】 情報基盤についてもっと入れてはどうかということを意識して、レポートのどこに入るかをイメージしてみました。10ページの産業構造の転換の部分について、情報通信業の占める割合、就業者の比率など情報産業にかかわる現状を挿入してはいかがでしょうか。それから、15ページの次世代産業の育成についてです。バイオと情報が一般的には次世代産業と言われていました。エネルギーも重要だが、情報も入れるべきと思います。21ページの5番目に情報通信基盤が交通基盤「等」でおさまる時代だろうかと思いません。交通基盤に劣らず情報基盤は強調すべきだと思います。

【根岸委員】 1点目は14ページ、なんとと言っても宮崎県の場合、東九州自動車道が完成していないために、大分県との格差問題、延岡の産業集積を十分活用しきれないというデメリットがある。宮崎空港を活かすためにもこのネックを解消していくことなしに、様々な問題は解決しない。完成していない高速道路整備を急ぎ、企業立地のポテンシャルを活かすことを入れていただきたいと思います。

2点目は都市圏の話です。産業の苗床になるという話だが、九州は東北に比べてまだ都市における中心市街地の賑わいを持っています。そういった中でインキュベータの機能を街なかで高めることが必要です。鹿児島や博多区の小学校跡にインキュベーション機能を整備する事例もあるようです。都市の魅力を高めるために苗床機能を期待すべきと思います。

【外井座長】 循環型ネットワークという表現はされているが、これでは不足という意味でしょうか。

【根岸委員】 延岡については、集積がありながら活かされていないという問題があります。交通基盤だけがないために、潜在力が失われているということ、課題としてはぜひ書いていただきたい。

【事務局】 工夫したいと思います。

【外井座長】 都市の中のインキュベーション機能はどこに書けばよいでしょうか。

【根岸委員】 18ページあたりがよいのではないのでしょうか。

【星野委員】 事例のないレポートはこのように、通り一遍になってしまうのかという印象を受けました。第3章が具体的な話につながっていくのか心配です。さらに、第3章に人材という項目を入れると、ますますオーバーラップしてまとめにくいのではないかと思います。別の切り口でまとめられないかと考えた私案ですが、1. 成長産業の一層の牽引力、2. 潜在力を持つ産業の掘り起こし(農業も)、3. 厳しい産業の再生、4. インフラ、5. 人材、6. アジア。産業面で3つ、環境面で3つあるいは4つに分けたらわかりやすいのではないのでしょうか。人材を入れると、全体に関わるため、曖昧になる心配がありません。

【矢田アドバイザー】 全体との関わりで整理しないといけないと思います。22ページの「終わりに」とあり、スケジュール感が記載してあるが、プロジェクトの具体名の挿入は、この委員会でなく県知事と政令市長による構成メンバーの会議で出されていくだろう。今からプロジェクトを入れるかどうかというよりも前に、この検討小委員会では前段階の大きな戦略の話をしている。3つの小委員会のレポートを立体的に組み合わせて、キックオフレポートとするので、人材についてその時点で大きく取り扱うこととなるだろうと考えているので、敢えて21ページに入れるという意見はありません。ただ21ページがさらっとしているという認識は共通しています。提言集の具体性を活かしていただきたい。情報も基盤だけでなく、それを活用した知識財産業というのか、研究開発やコンテンツなど情報自体が産業となっているところの振興が大事だろうと思います。

【外井座長】 小委員会のレポートは、構成よりも内容とその具体性を補完していったほうがよいということだと思います。

【鳥丸委員】 今の経済社会の中で格差社会が頻りに言われるところでありますが、格差社会に関する危機感が全体的に薄いようだ。九州北部が圏内でDI(景気動向指数)景況がよいが、鹿児島・宮崎は低い。20ポイントの格差があり、この格差は年々広がっている。南北格差の問題は、情報通信基盤と交通インフラの整備、計画中の高速道路を整備し、高規格道路でなくてもつないで循環型のインフラを整備することで、ある程度解消されるだろうが、産業間の格差もある。大分のDIは製造業と非製造業で大きな景況格差がある。製造業の方がよい。一つの地域の中でも平均はプラマイゼロなのだけでも、産業間の格差が広がっています。かつては製造業が牽引してよくなっていたが、原油高のコスト圧力で、売上げはどんどん上がっているけれども、従業員の賃金、労働分配率が上がらないと

いう実態があります。九州のなかの南北格差、九州のなかの産業間格差があるということ
を、現状として認識しておくべきだと思います。

【外井座長】 業種間格差は全国共通でしょうか。

【鳥丸委員】 業種間の格差は全国共通だが、地方の中の南北格差は九州の特徴だ。

【外井座長】 2章と3章をつなぐような部分は不要でしょうか。1章と2章から3章へ
は飛躍があるように思います。3章の5点が浮かび上がるような流れになっているだろう
か。なぜ5点が出るのかの論旨を明示すべきだろうと思います。

【矢田アドバイザー】 ここでの議論がもっと入るように、もう少し詳しく書いてはどう
でしょうか。提言集の具体性をもっと書き込んだ方が、親切ではないかという気がします。

【深川委員】 先ほど申しましたように、グローバル競争のなかで九州は地域格差を抱え
ています。発展攻勢をかけるためには、特定の論点だけで勝負することはできないので、
複数の論点をつなぐようなストーリーを描き、1 + 1が3になるような効果を求めていく
べきでしょう。私の提案は都市の話が中心で、コンテンツ産業の育成にアジア高度人材の
活用が重要ということを申しました。これは、ソフトなものづくりという論点、都市の魅
力づくりという複数の論点に関係しています。各論点を単独で語るのではなく、マトリッ
クスのように横通しするのが戦略的と思われる。

【外井委員長】 ポップカルチャーやサブカルチャーを担う産業については、どこに入る
だろうか。ものづくりでしょうか。

【深川委員】 ものづくりの「もの」には重厚長大なイメージがありますが、アニメー
ションなど国際的に比較優位を有する分野については、ソフトな「ものづくり」産業の育成
も考えられます。大都市である関東・関西圏とは別の観点での戦略が必要です。このこと
は、若者文化のサブカルチャー関連産業振興による若者の定着や、新しい、ものづくり教
育の模索ということにも関係してくると思います。

【矢田アドバイザー】 産業論をやっていますが、新しく出てきているものは原料が情報。
情報に付加価値を付けて、新たな情報や知識を生み出す。そこに付加価値を付けるのは古
くは編集、新しくは研究開発やデザイン、コンテンツ。これはものづくりとは別に考え、
たとえば知識産業とした方が整理しやすいのでは。原料も知識、製品も知識。これが新し
い産業として九州の戦略が出せるのではないか。ものづくりの延長としての整理は迫力が

なくなると思う。

【外井委員長】 そうすると、知識産業という言葉を使った項目を明確に挙げたほうがよいということになるでしょうか。

【矢田アドバイザー】 そういうことになります。

【根岸委員】 10 ページについて、宮崎の視点からみると、建設産業の大改革を行っており厳しい経営環境になっています。地域経済の現状の厳しさをより強調したほうがよいと思います。

もう一つは林業の問題。宮崎県では林業の担い手が不足し、山が荒れる状況にある。産業としての林業は厳しいが、産業構造の転換があっても国土保全としては重要であり、林業についてのコメントを拡充してほしいと思います。

【外井座長】 建設業と林業について 10 ページの の部分で触れるということだろう。林業などと観光をからめた山村留学やグリーンツーリズムなどについての記述がないと思います。どういう経済効果があるか分かりませんが、都市と地方の交流は重要だと思います。この小委員会において、整理するものかどうかはわからないが、全体のレポートには必要だろうと思います。

【鳥丸委員】 今の観点でいくと、九州の中だけでも、都市農村交流を進めれば経済効果は大きい。例えば3ヶ月間の法律を制定して、九州圏内を旅行するといったことを打ち出せばいい。韓国ではアジアの通貨危機時にメディアが国内旅行キャンペーンを張った事例がある。ディスカバー九州キャンペーンのような、圏内の交流を促進することの経済効果は相当あると思いますし、都市と農村交流の効果は大きいはずです。

【星野委員】 活力ある経済社会という検討小委員会だから、第3章の項目においては、1は成長型産業論、3は掘り起こし論、最後に再生論が産業と地域の格差あるいは衰退産業や取り残された地域の議論を4で盛り込めばよいのではと思いました。

【矢田アドバイザー】 自立の小委員会でも農林水産業はテーマになっており、発想そのものが再生は難しく、単体でなく複合産業として付加価値を上げなければならないという結論になっています。単体の産業として国際競争力を向上させるのは、無理がありますので、縦割りでは解決が付かないということを出してみてもどうかと思います。

【外井座長】 新しい視点も出たので参考にしてもらいたいと思います。プレ協議会のメ

ンバーからの意見はないですか。それではこのへんで終わりといいたします。活発なご議論をありがとうございました。いただいた意見をまとめて中間レポートに反映させていただきたいと思います。今後のスケジュールについて事務局から説明をお願いします。

【事務局】 議事の進行をありがとうございました。また、委員の皆様には、大変貴重なご意見を頂き、ありがとうございました。反映させたいと思います。続いて次回の会議と今後のスケジュールについて説明させていただきます。

【事務局】 資料4をご覧ください。活力ある経済発展を目指す小委員会のみスケジュールを掲載しました。本日は論点3、4、6と中間レポート案についてご議論をいただきました。貴重なご意見をありがとうございました。本日のご議論を踏まえたレポート（案）を作成し、今月中に意見照会をしたいと思います。これをもとに11月下旬あるいは12月上旬に第5回を開催したいと考えています。ご協力をよろしくお願いします。

【事務局】 今後の会議の進め方について説明させていただきましたが、このような進め方でよろしいでしょうか。では、このように進めさせていただきます。具体的には別途、連絡調整させていただきます。最後になりますが、提言集の第2集について紹介させていただきましたが、今回は学生編ということで、懸賞論文もいくつか合冊しました。また樗木先生からレポートを頂いておりますが、製本に間に合わないということで、別紙とさせていただきます。なお、ホームページにも掲載しております。

【小池副局長】 本日のご議論を反映させていきたいと思う。ありがとうございました。人材の話をどのように盛り込むか考えながら拝聴しました。今日はいろいろなヒントを頂いたと思います。検討していきたいと思います。

【事務局】 これで、第4回活力ある経済社会を目指す検討小委員会を終了したいと思います。本日は長時間にわたってのご議論を頂き、誠にありがとうございました。

以上。